

高木兼寛がたどり着いた宗教——神道・禊の行

高木兼寛先生がキリスト教や仏教をたずね歩いたのち、最後にたどり着いたのは神道・禊の行という奇妙な宗教であった。絶食にちかいかい状態で、身体を冷水に浸しながら、また大声を發しながらの激しい律動的運動や腹式深呼吸で心身を鍛錬して、神我一体の境地にいたるといふものであった。それは外見的にかなり奇抜な苦行であったために、周りの者たちは、高木先生もとうとうキツネが憑いたらしいと噂しあつたほどであった。しかし当の先生は大真面目であり、これは医学者としても教育者としても立派な合理的宗教であると確信していた。

I. 英国で医療の思想的背景を学ぶ

高木兼寛（1849-1920）の医療業績といえば脚気の疫学的研究、施療病院の新設、医学校・看護学校の創設、医師会の結成などで、すべて社会事業的なものであるが、しかしそれを実行させた原動力はいずれも高木の個人的な“医の心”にあったことはいふまでもない（ここにいう医の心とは、“病人の苦しみ、痛みに共感し、病人のために自然に手をだす心”のことである）。

この医の心について高木自身が語ることは多くなかつたが、それでも講演のなかで何度か「自分は生来涙もろくて困ることが多かつた」と語っているから感受性豊かな性格であつたことは間違いないであろう。実は彼が英国に留学したのも、海軍病院で、若い兵隊が脚気に苦しみ死んでいくのを見るにみかねて、その予防法・治療法を何とか学びたかつたからであつた。「外国で勉強して、どうにかしてこの病苦を無くしたいという願望は一瞬も脳裏を離れたことはなかつた」と述懐している。

彼は明治8年（1875）に英国に留学したが、そのときはじめて医療と宗教との間に密接な関係があることを知つた。その頃まで彼は医療の根底に医の

心があることは十分わかっていたが、医療と宗教との間に関係があるとは考えたことがなかった。彼がロンドンに着くや、この若い日本の医学徒に、知りあった友人たちはみな「お前の信じる宗教は何か」と聞くのであった。彼の家の宗教はいちおう（日本古来の）神道であったが、それは家の紋章のようなものと思い、自分自身の問題としては考えたことがなかった。この質問には、一応「シントウイズム（神道）の一人である」と答えていたが、しかしその実、神道の何たるかを知らず、またこの質問の本当の意味がわからず、ただ劣等感を抱くばかりであった。

そして薦められるままに、彼は英国に滞在しているあいだは毎日曜日教会に通うことにした。そしてここで彼は多くのことを学んだ。なかでも医療の背景に宗教的博愛思想があることを知ったのは貴重であった。「英国に参って一番に感じましたことは、この国の医療がすべてキリスト教の博愛思想を基本にしていることであります。これをみて私は、なるほどこれで行なければならぬという気持ちが衷心湧いてきたのであります。……帰国してからも、どうしてもこれで行なければならぬという気持ちが止みませんので、さっそく慈善病院（有志共立東京病院）を建て、医学校（成医会講習所）をつくり、博愛思想によって貧民を救済せんとしたのであります」と述べている。当時のロンドンでは、産業革命いらい貧富の差が大きくなり、それを緩和するために王室は病院に貧しい病人のための窓口を設けさせ、無料で治療させていたのである。

このように高木はキリスト教的博愛主義に基づく患者中心の医療には感動しながらも、しかしそのキリスト教の教義そのものにはどうも納得することができなかつたらしいのである。「どうにもこうにも信者の方の話が私の耳に逆ろうてならぬ。“神様は7日間で世界を創り、動植物を創り、最後に人間を創った”などという天地創造の話などは理屈に合わぬ、とくに人間は神に似せて創られたというが、どだい人体を構成している酸素、水素、窒素、炭素の如きは動植物をつくるそれらと全く違うところはない、この机を構成するそれらとも違うところはない、同質同体である。自分は科学万能主義の考えであるから、宗教的神秘的な話は耳に逆ろうて会得できなかったのでは

る」と述べるのである。科学至上主義者らしい青年医学徒の面目躍如たるものがある。はじめから「神」という「超越者」「創造者」を前提とした話には何とも同意しかねたのであろう。だから高木が英国で学び日本にもち帰ったのは、実は宗教そのものよりも、それに由来する博愛思想の方であったように思われる。

II. 人間関係の難しさから宗教の必要を知る

高木は明治13年(1880)暮れに留学を終えて帰国し、直ちに海軍病院長に就任した。病院には留学前高木と一緒に英医アンダーソン(E.W. Anderson)について学んだ後輩たちが待っていた(以後、彼らは高木の部下として高木のすすめるすべての事業に参加協力することになった)。

当時の日本の医療状況は、まったく今の途上国なみであり、医者にかかれない庶民、貧民が全国にあふれていた。医者(洋医)は全国でたった7,000人ばかりに過ぎず(現在のほぼ1/40)、その年間増加数も400人ばかりで(現在のほぼ1/20)、すべてが根本的に改革、改善せねばならないことばかりであった。

高木はとりあえず英国で学んだ知識をそのまま実地に応用していった。彼は、まず彼の部下である海軍軍医を中心にして、これに東京在住の勉強熱心な洋医を加えて「成医会」なる(英語系)医学研究会をつくった。そして以後この成医会の協力のもとに慈善病院(有志共立東京病院、後に東京慈恵医院)の設立や、医師養成のための医学校(成医会講習所、後に東京慈恵医院医学校)の創設にすすんでいった。また留学前から頭を占めていた脚気の研究を海軍軍医らを中心に遂行していった。とくに犬をつかった脚気発症の研究は犬と寝食を共にする苦しいものであった。

さらに高木は、全国の医療環境の改革やそれに関与する医師の身分保障のために、大日本医会なる医師会の結成に参加し、請われてその会長に就任した(今日の日本医師会の前身である)。これは全国レベルの政治医療活動であっただけに、その意思の統一は大変であった。

経済的問題で苦勞したのは慈善病院や医学校の運営であった。とくに慈善病院の医師の確保と給料をどうするか、医学校の教師の確保と給料をどうするかであった。答えは、これらすべてを高木の部下（海軍軍人）と高木を尊敬する成医会幹部の無料奉仕にお願いすることであった。彼らは自らの本業（海軍医務局員、開業医）の収入だけで、高木の高邁な事業のために無料奉仕してくれたのであった。

無料奉仕の一人、木村壮介（後の海軍軍医総監）は当時の仕事ぶりをこのように回想している。

「我々はその時分、30歳ばかりで、働き盛りであり、高木校長（高木兼寛のこと）の思うままに動きました。成医会を設ければ成医会会員になり、成医会講習所を設立すればその教員となり、慈恵医院を起こせばその診療医となり、犬脚気の研究をすれば犬と寝食をともにして苦勞する、何でもかでも校長の事業に携わってよく働いたものであります。校長の元気はまさに絶倫と申してよく、とても叶いませんでした。我々がいくら働いても、なかなか追いつくものではない、始終叱られ通しでありました。今思い出すと、よくもまあ命令のまま言われるままについて行ったものだと思うのであります」と。高木の強い指導の下にコマネズミのように働き続けたさまがよく表われている。

慈恵医学校での苦い経験

このように高木の意向が直接届く範囲では事は思い通りに運ばれたが、しかし届かないところではうまく運ばないこともあった（このことが高木の反省の動機にもなり、またひいては倫理、道徳、宗教の領域に踏み入ることもなったのである）。その一つは、東京慈恵医院医学校の学生たちの予期しない行動であった。

明治14年（1881）にスタートした医学校は、はじめは国家試験の予備校的色彩が強かったが、そのうち15-6年も過ぎた頃から次第に慈恵医学校らしい校風が芽生えてきた。学生たちは学生生活を楽しく意義あるものにするために自治会をつくり、運動部や文化部などの自治的な活動を行い、またそ

れを紹介する機関紙（東京慈恵医院医学校校友会雑誌）も刊行することにした（明治34年1月）。

高木校長は、この自治会の動きには初めから乗り気でなかったらしい。とくに校長を怒らせたのは、文化部が当時のドイツ医学の隆盛に刺激されてドイツ語講習会を開いたことであった。校長はこれを知り、講習会のための校舎使用を直ちに禁止した。英語医学の主導者たるを自ら任じていた高木には到底許せることではなかった。そしてこれを機に、彼は機関紙の発行を禁止し、さらに慈恵医学校校友会の存立そのものを禁止したのである。

高木にしてみれば、自分の理想的なカリキュラムに従えば、十分にすぐれた医師になれるのに、何の不足があってこのような我がままを言うのか、とうてい理解することはできなかった。とにかくこの事件は高木校長と学生との間の諸矛盾が一挙に爆発したかたちであった。

この高木の態度にはまた当時の社会状況の影響もあったようであった。歴史の教科書にはこのように書かれている。「日清戦争によって日本の資本主義は大きく発展した。……明治30年、片山潜らは労働組合期成会を結成し、労働者の生活を擁護する運動を展開した。翌31年は安部磯雄らが社会主義研究会をつくった。……これに対して山縣内閣は、明治33年に治安維持法を公布して、労働者の団結権を事実上禁止した。翌34年、片山潜、安部磯雄、幸徳秋水らは最初の社会主義政党である社会民主党を結成したが、ただちに解散させられた……」と。高木もこの慈恵医学校の自治会運動のなかに何か危険なものを感じたのではないだろうか。

このような高木校長側のきびしい処置に対して、校友会委員10数名は苦渋のうちにこの医学校を去った（当時の国家試験は必ずしも医学校卒業を受験資格にしなかったのだから、彼らは独学してこの試験に合格していったのであろう）。この事件は、高木にたいしても非常に深い精神的傷跡をのこした。

大日本医会での苦い経験

同じ頃、高木のところに深い傷跡をのこしたもう一つの事件があった。それは大日本医会による医師会法案の議会提出のときであった（明治31年

(1898)). 当時はまだ厳しい医師不足は続いており、また医師の公衆衛生面での仕事(伝染病対策など)もまだ多く残っていた。当時、医師になるには、東大医学部か地方の国公立の医学校を卒業するか、はたまた私立医学校で医学を学んだのち国家試験に合格するか、のどちらかであったが、医師不足を少しでも緩和するためには、私立医学校出身の国家試験合格医が絶対に必要であった。大日本医会では高木会長を中心に、国家試験は以後も続けること、また医師になった以上はその学歴に関係なくそれぞれの地方の医師会に入会して各地方の公衆衛生的業務(特に伝染病対策)に尽力すること、などを盛り込んだ「医師会法案」を作成していた(患者第一主義の立場)。

ところがこの動きに対して、かねてから高木の風下に立つことを嫌っていた東大医学部出身の医師たちは、この大日本医会に対抗する「明治医会」を結成して、激しい反対運動を展開しはじめた。彼らは、国家試験はもう施行を中止すべきであり、また医師会員になる資格も、国家試験合格医を排除して、正規の国公立医学校を卒業した者のみに限るべきであるとしたのであった(医師の権威主義の立場)。

大日本医会では、このような強い反対運動を受けたうえに、さらに会の内部においても高木会長の意向が徹底せず、不完全なままの法案を議会に提出せざるを得なくなってしまった。そのため衆議院は通過したものの、貴族院では否決されてしまったのである(高木にとっては裏切られた感じであった)。高木は責任をとって会長を辞任し、会はしばらく衰退することになった(会はその後、北里柴三郎を会長に推し、より完全な「医師会法案」を提出して、8年後の明治39年によく両院を通過させることができた)。

この事件について北島多一(北里の高弟、のち慶応義塾医学部長)は、高木の人物評を含めて、このように論評している。「この高木先生という人は学問もあるし、才能も非常に優れておる軍人であったが、すべてのことを命令でもってやっていくというような傾向が多分にあつて、医師会(大日本医会)のようなどころでは甚だ向かない。先生は軍人の部下を指揮していくような具合に考えておられるものだから、長く先生と一緒に行動をとるといふことは皆嫌って逃げてしまう。それが高木先生が失敗されたゆえんであるが、

利口なことと、才能においては、大変偉い人だった。また経済的な頭が非常に優れておった。そういう人であったが、他の人から見ると、もう少し誰か適当な指導者を得たいというのが皆の望みであった」と。高木にはどこか、自分を中心に会員がいっせいに動くのを好む性向があったのかも知れない。

高木には同じ頃さらに事務員の経費使い込み事件などがあって、神経的に相当参っていたらしい。その頃のことを彼はこのように回顧している。「そうこうするうちに明治35年に達しました。考えて見るに、どうも自分が経営している事業のために働いてくれる人々の素行が修まらず、何を致すにも不安であり、申さば何もかも独りでしなければならぬのであります。ご承知のごとく、私は病院を設立し、事務員を使用し、看護婦を養成し、かつ使用し、また医学校においては生徒を養成し、社会に対しては医師会など種々の事業に関係しております。ところがいずれの方面においても精神修養の不足の結果、心痛することが多いのであります。明治35年に至ってはじめて、規則とか法律とかいう如きもので事業を経営することは全く不可能であることに気がついたのであります。爾来、方向を変えまして、規則めいた事は成るだけ頼みにせず、人々の脳髄に根本となるべき思想を刻印することが必要である、それには何をすればよいかと考へ、種々の方面において教えを受けてきたのであります。そしてこれには宗教のことが深く関与していることを知ったのであります。……

自分が英国に5年半滞在しておる間、見聞したところでは、毎日曜日には市民全員がお祭りのごとく教会に集まって説教を聴き、また祈祷を捧げている。この事実を思い出したのであります。これがすなわち彼らの思想の根本になるのであります。これをもって考えれば、先ほどの問題を解決するには宗教的教育とその体験によるほかに途がないのではないかと考えたのであります」と。

この倫理、道徳と宗教との関係については、よほど考えるところがあったらしく、同じ明治35年におきた教科書疑獄事件の際には、成医会雑誌で「この事件は明治政府がこれまで倫理、道徳を支えてきた神道、儒教、仏教をすべて見限り、国民にたいして便宜的に修身教科書（明治5年）のごとき倫理、

道徳の徳目のみを教えようとした結果である。倫理、道徳の根本になる宗教を何も教育しなかった所為である」と断じている。そして倫理、道徳を植物の花にたとえて、「宗教はその根っこであり、根っこがなければ花はすぐ枯れ落ちてしまう」と断言した。宗教は倫理、道徳の究極的な意味を明らかにし、人間問題の究極的解決に関わりをもつものなのである。

余談であるが、新渡戸稲造が名著「武士道」を著わしたのも、米国において「はっきりした宗教もないような国に倫理、道徳など有り得るのか」と問われたことが動機であったといわれている。

III. 仏教信仰と心の遍歴

はじめ仏教に

明治30年なかばから、高木は急速に仏教に接近した。その主な理由は、同時期（明治36年）に結婚した長女の婿、樋口繁次（1876-1929）が慈恵医学校の教授であり、しかも大変信心深い仏教徒（禅宗）であったためであろうと思われる。その子、樋口一成の自伝によると、「祖父と父とは、少なくとも信仰心の篤かった点において、また仏事を尊重する気風において、すこぶる共通するところがあった。そのため高木家と樋口家を通じて、法要など仏事の催しが実に多く、少年の日の私にとって、それは甚だ迷惑なことであった。とくに、長時間に亘って仏壇の前で正座を強要される点は何よりも苦痛であった」とあるから、仏教への



写真1. 樋口繁次（1876-1929）
東京慈恵会医院医学専門学校産婦人科教授。高木兼寛は樋口を介して仏教に入信したといわれる。

接近、信仰はごく自然に進んだように思われる。

また高木は英国滞在中にキリスト教を知るが、前述のように、彼はこの宗教の「創造者」「超越者」を前提とするような教義の非合理性には我慢が出来なかったらしいから、それに比べてはじめから「創造者」「超越者」を前提としていない仏教には抵抗なく親しめたのかも知れない。仏教における「仏」は、世界の「創造者」でも「超越者」でもなく、むしろ宇宙的意思とか宇宙的秩序といった（あるいは「法」とか「真如」といった）非人格化したものだったのである。

キリスト教の神と仏教の仏とは、その本質において異なっている。キリスト教では、人間を超えた宇宙的意思を「神」として人格化したのたいして、仏教では、これを「法」とか「真如」として（つまり非人格化して）イデア的に捉えたのである。したがって仏教は、世界の自己法則性とこれを悟った人間（釈迦）とがあればそれでよいわけであり、神を人格化する必要がなかったのであろう。どちらかといえば主知的な宗教といえるのかも知れない。

慈恵医学校は明治36年（1903）に医学専門学校に昇格したが、そのころから高木は医学校に「明德会」なる精神修養の講座を開いて、学生に宗教家や文化人から毎月一回、講義を聴かせることにした。その目的とするところは、医を志す学生に強い倫理観をもたせることであり、その倫理の根本が宗教にあることを教えるためであった。

明德会の幹事役が前記の仏教徒、樋口繁次であったためか、講義はしぜん仏教的なものが多くなった。講義のはじめには「仏・法・僧」に感謝する礼賛文を斉唱し、合掌してから拝聴するのが慣わしであった。講師の多くは名僧高德であり、したがって医師の条件である医の心の大本は仏の慈悲心に由来していることも強調された。

明德会は学生のみならず、一聴聞者としての高木自身の宗教的境地も深めていった。そして中でもその心を捉えたのは禅仏教であった。禅の精神にみる「超越者」をおかない徹底した合理性に共感するところが多かったからで

あろう。明治44年には、同和会という禪の修養の会も別途に結成された、これも毎月一回参禅の会を開き、釈迦の像を掲げ、師家の提唱を聴き、座禅をおこなった。

仏教に安住できず

しかしそれにもかかわらず、それを究めていくうちに、高木はそこにも安住し難いものを感じずようになったらしい。そして彼が最後にたどり着いたのがすなわち「神道・禊の行」だったのである。

仏教（禪）にどうして安住できなかったのか、そのほんとうの理由をよく分からない（その心情を語る資料が残っていないのである）。しかし少なくともその一つは、禪の個人主義的な性格にあったのではないだろうか（理由としては少し情緒的に過ぎるが）。独り座り、静かに瞑想して、自己を世界の中、自然の中に埋没させていくといったまったく個人的ななみが、どうも高木の気性に合わなかったのではないと思われる。高木にはやはり、みんなと一緒に大声を出し合い、激しく身体を動かし、それによって心身一如の効果を期待するといった熱気ある行事の方が気性に合っていたのではないかと思うのである。

仏教に安住できず神道に魅力を感じたもう一つの理由は、自ら幹事長を引き受け、故郷宮崎の宮崎神宮の大造営にかかわったことではないか（この神宮の祭神は神武天皇であり、古くは神武天皇社または神武天皇宮と称されていた）。実施計画（明治31年）から、寄付金集め、維持費の捻出法に至るまで苦労は多かったが、造営竣工（明治40年）にいたるまでの10年近い間に、我が国の古典や神道について深く学び、親しむことができたのではないか、と思うのである。

仏教に安住できなかった三つ目の理由は、彼の二度目の外遊にあったのではないか。彼は、日露戦争勝利の翌年、明治39年（1906）の1月から約半年間（26年ぶりに）欧米旅行に出かけたのである。彼の脚気研究の成功を欧米の主要大学で講演すると同時に、欧米諸国の国情を視察するのが目的であった。そしてこの旅行で、彼は日本固有の歴史と日本国民のアイデンティ

ティーに大きい自信を得て帰国したのであった。それまで西洋化主義者と目されていた高木はこの旅行から目だって日本主義者、国粹主義者になっていった。

高木の脚気栄養説は日本の学者の名誉になった。高木はこの二度目の外遊によって大きい自信を得て帰国したのであるが、その自信の大きな要因は、彼の持参した脚気の研究が欧米の学者によって極めて高い評価を受けたことであつた。日本国内では、彼の研究は東大・陸軍グループによってさんざん蔑視され続けてきたのであつたが、それが一挙に逆転したのである（著名な国際誌ランセットはその全講演内容を15頁の大論文として掲載した）。

高木は脚気の研究を始めたとき、明治天皇に「この病気の原因を研究いたし、これを予防することができますれば日本国民ならびに医学に携わるものの名誉でございます。我が国にかくも多数発生する病気の原因が外国の学者によって発見されるようでは、日本の学者の不名誉でございます」と上奏申し上げたが、それから23年目にしてようやくそれが正夢になったのである。彼が自信をもって帰国したのも当然であつた。

帰国して間もない頃、彼はこのような講演をしている。「キリスト教は欧州の精神界において権威を失いつつあり、学者をはじめ中流以上の人々は宗教的信念を消滅しつつあるようであります。そして反面として、新たなる宗教的一大信念、新倫理説が生まれる徴候があります。この新しい信念、新しい倫理説は、ちょうど我が日本古来の祖神垂示の根本信念に比すべきものであり、換言すれば、この日本的信念はむしろ世界各国から遠からず歓迎される可能性があるのであります。我が日本国民はこの事態にもっと覚醒して欲しいのであります」と。

ヨーロッパでは、近代科学技術と資本主義によって、古いキリスト教的価値体系は次々と崩されつつあつたのである（19世紀末、ニーチェはこの状態を「ニヒリズム」と言い放つたのであつた）。

日本においては明治維新以来、福沢諭吉ら知識人は、我が国のアイデンティ

ティーを失わないために「和魂洋才」（日本本来の思想はそのままして、とりあえず西洋化、近代化を進めよう）という言葉をつくって自戒したのであったが、高木は、むしろ維新政府による思想（倫理、宗教）の削除、棄却を非常に嘆き、「無魂洋才」のごとく思っていたのであった（前述）。しかしこの外遊の経験から、これからは自信をもって日本本来の思想を思い起こし、それを基にしてより合理性のある新しい思想を組立てて、本当の「和魂洋才」にできるのではないかと考えたらしいのである。そして欧米諸国はむしろそのような日本の思想を求めているのだというのである。

ところで日露戦争の結果、日本ではロシアからえた南満州の権益で重工業が飛躍的に発展し、そのなかで三井、三菱のような少数の企業家は独占的な力を獲得していった。一方これに対抗する労働運動も急速に力を強め、次第に政治的色彩を帯びていった。

そのうえ日露戦争に続いて世界はこんどは第一次世界大戦に突入し（大正3年（1914））、そのころのヨーロッパの思想的混乱は日本にも一層大きく波及した。とくに労働運動のなかに、自由主義・無政府主義・マルクス主義などの思想が浸透して、さまざまな社会運動が展開されていった。幸徳秋水、菅野スガラの無政府主義者12名が処刑された大逆事件があったのもこの頃である。

IV. 神道・禊の行

高木がはじめて「神道・禊の行」とその指導者、川面凡児（1862-1929）のことを知ったのは、大正4年（1915）1月、築地の水交社で行われた古典研究会においてであった。そして川面の説く「禊の行」に大きい共感を覚えた。高木はこのとき川面にこう告げている。「現在、国民思想ははなはだ混乱している。しかしもっとも重要なことは思想の本源である信仰の問題である」と。

ここで簡単に日本古来の「神道」と「禊の行」について説明しておきたい。神道とは、事典風にいえば、日本の風土の中で自然発生的に生まれ、外来思

想や外来文化の影響を受けながら歴史的に形成されてきた日本国民の信仰の作法であり、「カミ（神）」と呼ばれる聖なる存在に対する畏敬の念に基づく祈りと祭りの信仰体系である、ということになるであろう。

ここでいう「神」とは、キリスト教における神のように、人間の外にあって、仰ぎ見るような人格的なものではなく、むしろ人間のなかにあって、しかも人間を包み、自然を包み、世界をも包む、大きな命のようなものと考えるのである。仏教の「草木国土悉皆成仏」とか「一切衆生悉有仏性」という思想、つまり万物すべてに仏性があるという思想に非常に近いのである。言い換えれば、神とは万物を万物たらしめ、それに命を吹き込み、生命力と創造力を与える根源であると考えるのである。そしてその自然の生成力を壽ぎ、感謝し、喜び合って、神々と人々とが一緒に交わり遊ぶところに神道の祭り（神事）があったのである。

神道の一教派である「禊の行」においても、その基本は変えることはない。禊の行ではとくに水の霊力によって穢れが祓われると同時に、新たな神々、新たな力、新たな命がよみがえり、生みだされると信じるのである。禊の行は、こうした古くから日本人が信じてきた山や川や森や海や畑や水田など、自然の中に宿る神々の霊力（生命力）を、一定の決められた呼吸法や発声法や身体運動の作法によって、己の体内に採り入れ、身をすすぎ清めて、己の生命力の回復をはかり、諸々の願い事を現実化していこうというものであった。

「禊の行」の実践

高木が築地水公社において川面凡児を知り（大正4年1月）、彼の「禊の行」に大いに魅力を感じたことはすでに述べたが、高木はさっそく同1月の21日から始まる神奈川片瀬海岸での寒禊の見学に出かけた。その時、高木はこのように述べている。「この高木は貴族院議員になると共に医学博士である、何ら徹底したる理由もなしに共鳴することは出来ない。医学博士の肩書きのある高木が妄信して、稲荷かキツネを担ぎ廻るように批難されては一身の面目が立たぬばかりでなく、大道発揚のためにも害ありて益なし。禊の行事

は心身不二の鍛錬法として如何にも結構なるものと思えども、この上は先ずもって生理学的試験をなし、その果たして害なきや否やを究明せねばならない。これ医学博士としての高木が、高木の立場として然るべき筋道であると思う」と（高木は、ここで医学博士の権威を示したかったばかりでなく、また何よりも実証を重視する医学研究者であることを強調したかったのであろう）。

高木はこのように言いつつも、気持ちの上では、もうすべてこの禊行を支持し、全身を投じていた。同じ大正4年の8月の御嶽山（東京）での夏禊には、自ら禊行事に参加すると同時に、彼の要請によって生沼曹六生理学教授が指導する「禊の生理学的研究班」も同行した。こうして高木の熱意はますます高まるばかりで、それ以後、大正5年1月の寒禊（神奈川片瀬）から同年8月の夏禊（長野戸隠）、大正6年1月の寒禊（静岡興津海岸）、同年8月の夏禊（静岡大宮浅間神社）、大正7年1月の寒禊（静岡興津海岸）、同年8月の夏禊（静岡大宮浅間神社。写真2）まで毎回行じ続けた（病気のため参加できなくなるまで計7回続いたのである）。生理学研究班もほとんどこれら禊行に同行、協力した（被研者の延べ総数は100名を超えたという）。また



写真2. 静岡県大宮浅間神社での夏禊会（大正7年8月）
前列左から 山田時次、永山武美（医化学助手）、高木兼寛（校長）、川面凡児（指導者）、綿引朝光（細菌学教授）、寺田正中（細菌学助手）

表 1. 禊会日々行事表

1.	起床（日出時刻 1 時間前）……洗面，雄健，雄詰。
2.	天の鳥船（数百回）……掛声……雄健，雄詰。
3.	潜水（日出時刻前後 5 分ないし 10 分間）……鳥船運動。
4.	拝神（約 2 時間）……鳥船運動……雄健，雄詰，伊吹。
5.	食事（午前 9 時）
6.	拝神（約 2 時間）……鳥船運動……雄健，雄詰，伊吹。
7.	潜水（午後 1 時，潜水時間 10 分ないし 15 分）……鳥船運動。
8.	拝神（約 2 時間）……鳥船運動……雄健，雄詰，伊吹。
9.	同上
10.	食事（午後 6 時）
11.	講和（懇談）

今裕病理学教授や森田斎次解剖学教授らもしばしば禊行に参加した。

禊行の凡その内容は表 1 に示すとおりである。これは 1 日の行事であるが、この行事を 7 日間続けるのである。ここに潜水とは禪一つになって、寒禊では海水を、夏禊では山間の冷水を浴びることである。また食事は日々朝夕 2 回で、毎食 5 勺（米半合）の粥と干梅 2 粒，胡麻塩少量のほか何も食べない。その他、表 1 の各用語の神事的意味の説明は、これはなかなか難しい。これについては高木自身が解説した著書「禊に関する神事の概要」が現存するのでそれを参照していただきたい。ただ表中の「雄健（おたけび）」の説明だけは、高木がそれと物理学、化学との関係を述べた興味深い文章があるので、その部分だけは引用、説明しておきたい。さしあたって雄健（おたけび）というのは、大声で「生魂（いくたま）」、「足魂（たるたま）」、「玉留魂（たまとまるたま）」、「○○○常立之命（○○○とこたちのみこと。高木の場合なら高木兼寛常立之命）」と唱えながら、これに同調して次々と一定の体位、姿勢をとることである。

神と物理学，化学

高木が「雄健」の説明で神と物理学，化学との関係を述べている部分というのは次の文章である。

「雄健について使われる「生魂」「足魂」「玉留魂」「高木兼寛常立之命」と

いう用語には、実に神妙なる意味が潜んでいる。余の信ずるところを、現在の物理学、化学の内容から説明してみたい。

天地間の万有は、物理学的方法によりてこれを「分子」に分解することができるのであるが、しかしその分子なるものは純一の実在ではない。これはさらに化学的方法によりてこれを「原子」に分解することができるのである。若し世に化学が信ぜられなかったならば世人は何時までも物理学上の「分子」を以て万有の原型たる純一の実在と思惟していたに相違はあるまい。即ち「分子」がさらに「原子」より成るといふ一歩進んだ確認を持つにいたったのは、全く化学の賜なのである。

而してかつて科学の未だ進歩しなかった時代においては、何人も「原子」が複合体であると考えていたものはなかったであろう。然るに今日は、その「原子」がさらに無数の「電子」より形成せられているという事が実証される程にまで科学が進歩してきた。若しも今日が学問進歩の極点で、最早これ以上に学問の進歩は望み得られないとしたならば、「電子」こそ万有の極致的根源の純一なる実在として、永久に確信せらるるに相違あるまい。

しかし学問の進歩は案外に迅速なもので、他日精神統一の結果として学者の心眼が開き、その心眼に映じた心靈上の事実が、厳粛に攻究せられる時代が将来したならば、「分子」が「原子」より成り、その「原子」が「電子」より成るとく、その「電子」がさらに幾百千万億の「靈子」より成る事が実証されるに相違なからう。(時代のせいであらう少しおかしいところもあるが、「電子」を現代物理学の「クォーク」におき替えれば高木の言わんとする論旨はいまでもほぼ通用する一筆者)

神道においては、万有すべてに靈魂（御霊・みたま・神）が宿るとみなされているが、これが偶然にも物理学、化学の極致に徹底しておるのは実に妙ではあるまいか。而してその「靈子」なるものは宇宙の本体たる「大神」の分靈として万有に遍在し、しかも万有を形成する極致的純一の原型で、それが自体を主観すれば自性ある精神的実在であり、我々がこれを客観すれば物質としての一微粒であるのだ。

雄健の内容たる「生魂」というのは、我々がこれを客観したところの「靈

子」そのものをいうのであり、その複合したものが「足魂」であり、さらに複合したものが「玉留魂」なのである。すなわち我が身体、精神は、我が最遠の大神の分霊たる「生魂」の幾百千万億が集積して成れる「玉留魂」であるべきであるから、我が高木兼寛は、すなわち「生魂」「足魂」「玉留魂」なる「高木兼寛常立命」であらねばならないのである」。

ここに高木が示した「宇宙万有の根源的実在である電子（正しくはクォーク）は神の分霊である霊子より成る」という見解は実に大胆で興味深いものである。これについてはまた後で触れることにする。

生沼曹六教授らの「禊の生理学的研究」

研究者としては、生理学教授の生沼曹六（1876-1944）をはじめ慈恵医学士の永山武美、南崎雄七、寺田正中、増田高造、石鍋信雄、進藤利正、薬剤師の山崎義一ら計8名が参加した（この中の永山武美、寺田正中は後にそれぞれ医化学教授、細菌学教授に就任した）。

彼らは大正4年（1915）8月の夏禊から同6年1月の寒禊までの計4回の禊について合同研究を行い、その報告をおこなった。研究種目の生理的なものとしては体温、脈拍、呼吸、握力などであり、尿（24時間尿）の分析については尿量、比重、総酸度、尿素、尿酸、食塩、燐酸、クレアチニン、蛋白、全窒素などであった。尿の分析は煩雑であったためか、大正5年1月の寒禊と同6年1月の寒禊の2回だけになっている。

禊期間中大きい変動のあった種目は少ないが、尿成分のなかの尿素と尿酸の日日変動のみは図1に示すように、比較的大きく興味深い。両成分とも禊開始日から上昇し、開始3日目に最高に達し、4日目に急激に下降して、5日目に旧に復するという一過性の変動である。同図は大正6年1月の寒禊のときのもので、5人の平均値である（この検査値の中には高木兼寛校長、今裕教授の数値も含まれている。そして高木校長の尿の中だけには痕跡の蛋白が認められた。この図は表示された数値から筆者が作図したものである）。

この尿素、尿酸の変動は、おそらく潜水、寒気、それに絶食に近い食餌制限などによるストレスのためと考えられる。後年、セリエ（Hans Selye）が

主張したストレス反応 (ACTH-副腎皮質ホルモン系活性化) によって蛋白質の分解, 核酸の分解が亢進したためであろう (高木は禊行によるこの身体成分の新旧交替はむしろ好ましいことだと考えていたらしい)。

生沼教授の結論では, 禊が身体に積極的に好結果を与えることはないようであるが, といって障碍をのこすこともない, 問題にされてきた断食に近い食事制限も, 7日を限度とするかぎり心配することは無いだろうということであった。ただ高木校長のように尿に蛋白がでるような (腎障害のある) 人は行はずべきでないということであった (しかし共同研究者・永山武美の再三の説得にもかかわらず高木は頑として聞き入れなかったといわれる)。

「禊の行」の身体的, 精神的効果

高木は, この生理学的研究の結論, すなわち禊行にはそれほど害は無いという結論だけでもう十分満足であった。それは今まで苦しんできた持病のリウマチが驚くほど良くなっていたからであった。「禊をはじめてから, 年ごとに軽快を覚え, 歩行も一層容易になり, 気分的にも常に爽快を覚え, 音声はますます強壯となり, 1日5時間程度の演説でも咽喉に痛みを覚えず, ほとんど疲れない状態になった」のである。

また従来の大沢謙二 (東大生理学教授) の断食の研究によれば, それは身体に害があるということであったが, 今回の生沼教授らの研究では, 禊の条件ではそれほど害はないということであった。この報告に接して, 高木は

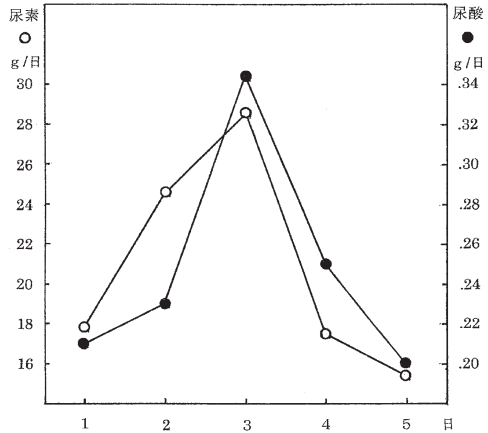


図1. 禊行による尿中尿素, 尿酸排泄量の変化。
生沼曹六教授ら「禊の生理学的研究」より。

もう「生理学的に害なしという証明が得られれば禊行事の将来は万歳である。……害なきことが証明されたる以上は、その反面には保健的に有効なることを暗示せられたるものと解釈せらるるではないか」と楽天すぎるほどの喜びようであった。

精神的効果については、さらに大きいものがあつた。高木の禊に打ち込む理由の一つが、精神的苦しみであつただけに、このことは大変喜ばしいことであつた。苦しみの原因である欲念が次第に減じ、非常に深い神我一体の境地に達することができたというのである。

「段々に行が進むにつれて、心身の統一ができるようになる。そうなれば我が身ながら神代の赤子に蘇つたような気持ちになつて、その精神は明鏡のごとく止水のごとく、ほとんど心にかかる一塵だもなくなる。神我一体たる悟りの端緒が開かれて、底暖かな信念が湧いてくる。

修禊によりて得たるこの信念は、以後長く己を支配するから意志がきわめて強固になり、一旦己の決心覚悟を定めた事は、如何なる艱難があろうとも、一路邁進、その志を貫かずんば已まずという勇気が起こってくる。修禊上の悟りとして、我々がなす一切の仕事はみな神事（かみわざ）であると心得ているから、仕事をするということが愉快でたまらなくなってくる。……知的

作用の上においても、注意の集中が容易になるためか、観察が緻密になり、理解は明瞭に、記憶も、想像も、推理も確實になり、頭のなかで思想を運用することも、口や筆でこれを表彰することも、共に円滑にできるようになる。……情緒的方面についても、感情が至極平和になつて、喜怒哀楽その恒を喪うようなことはなくなる。かくのごとく



写真3. 生沼曹六（1876-1944）
東京慈恵会医院医学専門学校生理学教授
高木兼寛の依頼によって禊行の生理学的研究を指導した

智情意の三方面がそれぞれに異常の発展をなすに止まらず、この三方面がよく調和統一して、精神全体の作用が常に円満に行われるようになる」というのである。

とにかく高木は、禊行を重ねるに従って、その精神面、身体面において、それがきわめて有益であることの確信を得たので、それからのちは友人知己などにたいしても、この禊行を極力推奨していった。それを迷惑に思った人も多かったらしいが、しかし理解し同調する人も相当増えて、そのご大正7年（1918）に「禊友会」をつくったときには全国からの禊参加会員は5千人にもなったといわれる。

慈恵病院に説教所 その頃、高木は慈恵病院の前庭に説教所なる建物をたて、そこで患者、職員に毎週、宗教の話聞かせている。患者にとっては身体の療養ばかりでなく、心の救済が必要である。心身一如である（全人的医療である）というのが彼の主張であった。これも彼の宗教的修養の成果であったと思われる。

V. 高木がたどり着いた神観—— 汎神論

遠藤周作は遺作「深い河」のなかで、主人公のカトリック修道士に「神は、人間の外にあって、仰ぎみるものではなく、人間のなかであって、しかも人間を包み、樹を包み、草木をも包む、あの大きな命です」と語らせている（神は万物を万物たらしめる生命力の根源だというのである。この神観は遠藤周作自身の神観であったといわれる）。そして同作品のなかで、先輩神父に「その考えは汎神論的だ」と強く批判させている。このことは、かつて13世紀のドイツのカトリック神学者、エックハルト（M. Eckhart）が「すべて人間は神の生命に甦り、神が人間の魂そのものになる」と説き、そのことが汎神論的であり、神と被造物の区別を無くしたとして激しく批判され、異端視された事件とよく似ている。

実は、高木がたどり着いた神の観念もこの汎神論に極めて近いのである。

彼もまた「神というのは単に人間を超えたものの尊称ではない、本当の神はすべての実在を指すのであり、人間も草も花もみな神である。これはキリスト教の God とはたしかに違っております」と述べている（明治42年）。そして敬神についてもこのように語っている（大正6年）。「敬神とは単に神を敬い神を拝する意味ではなく、また神に祈り幸福を求める意味でもない。敬神とは、神を敬すると同時に我が身をも重んじることである。何故なら、我が身は神の延長身なるが故である。つまりただ神を敬うだけが敬神でなく、我が身を尊重するのも敬神である。我が身を尊重するばかりでなく、外界・自然物をも尊重せねばならない。これまた均しく宇宙根本の神の延長身なるが故である。神を敬し、我が身を重んじ、自然物を愛するときは、これ実に同根一体の実を顕すものである。これみな宇宙根本の神の心を実行する身なれば、その身もまたすべて神である。すなわち神の心を行う人間も、神の身たることを証明したるものにして、生前においてすでに神たる神格を發揮しているのである」と。

神と同根であるから、人間も自然も同根一体、すべて神たる神格を發揮しているのだとは実に大胆な考えではないだろうか。先に述べたエックハルトの「神が人間の魂そのものになる」と同じことを別の面からより具体的に表現しているのである。高木が先に禊の行の結果、精神が明鏡のごとく止水のごとく心にかかる一塵もなくなったと言ったのも、心そのものが神の魂にあたるからであろう。

実は高木は、この神格にたいする合理的説明もすでに行っているのである。先ほどの「雄健」について述べたことと重複するので意識してのべるが、「物質の最終的微粒子は霊子であり、これが集合して電子（正しくはクォーク）となり、原子となり、分子となり、さらに分子が集まって我が身体、精神になる。しかも霊子なるものは宇宙本体たる神の分霊であるから、身体、精神そのものが神になることは当然の結果である」というのである。要するに高木の汎神論の特徴はこの霊子を基本とするその要素主義的な考え方にあるように思われる。

高木のこの考えを敷衍すれば、霊子は、たとえ生物の死によって飛散し、

風になり、雲になっても、再び集まり川になり、森になり、また生物に帰っていくという大きな生命の流れを流れているのである。その生命の流れは神の様態の変化とも（霊子の様態変化とも）言えるのであろう。高木が先述の「和魂洋才」の和魂に当てはめたかったのは、実はこのような日本古来の思想（生成の思想）だったのではないだろうか。

栄養学、環境衛生学と神

高木の栄養学は、脚気の研究で精緻になっていったが、禊を修するようになってからは、さらに神との関係もはっきりしてきた。高木は滋養物として、水、塩類、含窒素物（蛋白質）、含炭素物（炭水化物）の4つをあげて、それぞれについて論じている（ビタミンはまだ発見以前であるので話題になっていない）。そしてこれら滋養物はみな神であるというのである。

「まず水であります。水なくして生物は一刻も生存することはできません。日本では昔から、水には水の神様、つまり水神様がおられると教えられてきました。だから水神を穢したり、粗末にしては、何れの日にか祟りを受けると思ってきたのであります。井戸の水、川の水にたいして、昔の人は非常に厳しい規則を決めております。……そのため急性の伝染病などは流行しなかったのであります。……

次は塩類、つまり金属の類であります。金属にしましても、水と同様にそのものが神様であります。……

その次は含窒素物（蛋白質）、含炭素物（炭水化物）であります。主に穀類であります。穀類には穀類の神様があります。米という神様、麦という神様、粟という神様、豆という神様、その他様々な神様があります。あらゆるものは一面からいえば神様である。しかも神様といっても、名前が異なるように、その働きも異なるものでありまして、色々の神様のご協力なされるから目的が達せられるのであります。一人の神様で何もかもという訳にはまいりません。そこで食物の配合、俗に申して献立が必要になってくるのであります。様々な神様が、我らの肉体を維持するのに適当なる割合でお受け持ち下されれば、吾人の身体は病気に罹らずにすむ。若しその注意を欠き、互いに

勝手に行動なされると、吾人の肉体を健全に保つことができなくなるのであります。……

以上申した通りで、吾人が身体に摂取するところの滋養物は、ことごとく神様であります。この神様を穢さぬように意を払い、尊敬いたしますならば、我々の身体は健全を保つことができるのであります」。 (ここで語られているのは、まさに高木兼寛の「汎神論的栄養学」とでもいうべきものであろう一筆者)

「一方、環境にあたる山には山の神様がおられ、山を荒らしたり穢したりしたら、この神様の怒りに触れるから、昔は山を粗末にするようなことはしなかった。山の神のために祠を建てて、山を清浄にしたものであります……

ところが祖先がお定め下された方法は、いわゆる現代的文明の方法とは、かなり趣を異にしております。今日は、戸毎に嚴重に検査をするかと思えば、他面では山を無茶苦茶に荒らし、木を伐り出してしまうから、山に居るべきものが、里方へ出てきて、人間に害をあたえることになるのであります」。 (ここ 100 年ばかり、日本はまったく同じことを繰り返してきたらしい。いずれにしる本当の環境保護は、人間中心の自然征服的な考え方でなく、人間も自然の単なる一構成員にすぎないと考える汎神論的な自然観によって行うべきであろう。自然にたいする畏敬の心が必要なのである。神とともに生きるということであろう一筆者)

縁あるものすべてに感謝 高木の最晩年の大正 8 年頃の逸話が加藤義夫 (内科学教授) によって語られている。「学生や若い医師が煙草の吸殻を道に捨てたり、鼻紙を床に捨てるのを見つけられると、先生は非常に怒られ、『それは君のために尽くしてくれた物ではないか、捨てるべき所へ捨ててこそ報恩感謝の念を表す道である』と懇々と諭されたものである」と。自分に役立ってくれた物すべて (汎神) に感謝している姿がよくあらわれている。

ここで汎神論について、もう一度高木の言葉でまとめてみると、「宇宙の中心は根本本体としての大神であり、宇宙万有は、その大神より拡大分派し

たものである。……汎神とは、宇宙万有の個々分々の神々を総称したものであり、実に宇宙の中心より霊の発達延長した延長神である。……大神の発達延長したものが汎神であるからして、大神即汎神、汎神即大神であることは当然である」ということになる。要するに、世界は神であり、神と世界の間には質的な対立を認めないということである。

ただこのような汎神論を肯定しつつも、力点のおき方によって二つの型に分かれるともいわれる。第1の型は神に力点をおき、神は世界現象一切の内的原因であり、世界は神の表れにすぎないとするのに対して、第2の型は世界の方に力点をおき、世界こそ実在であり、神は実在するものの総称にすぎないとするのである（その第1型、第2型の徹底型はそれぞれ観念論哲学、唯物論哲学になるといわれる）。

これまで述べてきた高木の考え方から推して、高木の立場は間違いなく第1型、すなわち神に力点をおく汎神論であったと考えられる。

高木は大正9年（1920）4月13日に逝去した（享年72歳であった）。臨終の床にあった高木は川面凡児に「何とかもう一度元気になってお国のために尽くしたい」と告げたという。もしそれが叶ったとしたら、その時には高木自らの神、すなわち高木兼寛常立之命（前述）があらわれて高木とともに（高木からいえば神とともに）一体となって日本国のために働いたのではないだろうか。

文 献

- 1) 高木兼寛。禊に関する神事の概要（大正7年（1918）頃、高木が執筆したものであるが、高木喜寛著「高木兼寛伝」東京：大空社；1998にも収録されている）。
- 2) 高木兼寛。心身修養。東京：広文堂書店；1916。
- 3) 川面凡児。男爵穆園高木兼寛大人敬神事績（上の高木喜寛著「高木兼寛伝」に収録されている）。
- 4) M. エックハルト。相原信作訳。神の慰めの書。東京：講談社；1985。